



2025

学校だより **本荘** Smile

令和7年度 第31号
令和7年12月17日
熊本市立本荘小学校
校長 西川 英臣

6年生の研究授業がありました。「模型のまち」です。



9月24日に6年生の研究授業がありました。「模型のまち」というお話です。どんなお話でしょうか？最近になって国語の教科書に掲載されるようになった、比較的新しい、現代的なお話です。作者は中澤晶子さん。「模型のまち」は、広島への原子爆弾投下を題材とした戦争文学です。小学6年生の主人公が、転校先の広島で過去の戦争と向き合い、自分ごととして捉えるようになる様子を描いています。お話のあらすじは以下の通りです。

主人公は、小学6年生の「亮」さん。舞台は、現代の「ひろしま」。「広島」でも「ヒロシマ」でもなく、「ひろしま」と表記しているところに、物語のテーマが隠されています。亮は、広島の小学校に転校してきたことをきっかけに、それまで遠い存在だった戦争や原爆について意識するようになります。物語は、現在の視点から過去を振り返る形で進みます。クラスメイトの真由や、夢（または想像上の「まち」）で出会う「かっちゃん」という少年との関わりを通じて、亮は広島の子供たちの歴史や人々の暮らしの記憶に触れていくのです。このお話のテーマなのですが、この作品は、戦争の悲惨さや平和の大切さといったテーマに迫るために、多くの象徴的な表現を使っています。（裏面へ）

例えば、「街」ではなく「まち」とひらがなで表記されている点や、「ビー玉」、白い色などが持つ意味を考えることが重要な要素となっています。亮は、かつてそのまちでビー玉遊びをしていた子どもたちにも、自分たちと同じように「ちゃんとふつうに色があった」ことに気づかされます。模型のまちとして出会った、戦時中の「ひろしま」。そこで遊んでいた子どもたちは、きっと、その多くは原爆の犠牲になってしまったはず。でも、自分たちと同じように生きていたのです。この物語は6年生の国語の教科書教材であり、子どもたちが戦争について深く考えるための作品となっています。

授業では、文中で使われている、色や表記をもとに、6年生が自分なりの考えを発表し合っていました。「対話」を通してそれぞれの根拠や論拠を吟味し合い、お互いに一つの物語を通して、作品のテーマに対する「ものの見方・考え方」を広げていくことができるような授業となっていました。6年生らしい、立派な授業になっていたと思います。(校長)

校長先生の虫眼鏡 「模型のまち 広島にある原爆ドーム」



この授業が行われる前の夏休みに校長先生は、広島まで取材に行ってきました。原爆ドームは、静かにたたずんでいました。